息子へ

拝啓
窓からのぞく富士山の輪郭が、いっそうくっきりと見える季節になりました。
空気がひりひりと張り詰める寒さの厳しい時期ですが、風邪など引かず元気にやっていますか。
毎朝のジョギングは続けているのでしょうか。
よい習慣とは思いますが、体調の悪いときなどは無理をせず、休養することもたいせつです。
あなたは昔から根を詰める質ですから、きちんと自制できているのか心配しています。
くれぐれもご自愛ください。
畑で採れたいちごを送ります。
つぶはそろっていませんが、甘くておいしくできました。
外食ばかりで野菜やくだもの不足でしょうから、毎日少しづつでも食べるようにしてください。
来月の週末にはそちらの下宿に行きます。大家さんにもその旨よろしくお伝えください。
これから寒い日が続きますが、しっかり栄養と睡眠を取り、どうか健康でお過ごしください。
母より

『帰省、そして』

しょうくんは自分からチャイルドシートにのぼり、ベルトを締めました。
おねえちゃんも助手席のジュニアシートに座り、車の中で観ていきたい映画のソフトを選んでいます。
おじいちゃんが、畑で取れた野菜をせっせとトランクに積み込んでいます。
おばあちゃんはにこにこして、うしろの窓の外からしょうくんに手を振ります。
さあみんな、準備はいいかな。
おじいちゃん、荷物、積み終わりましたか。いつもすみません。
おばあちゃん、そろそろ動きますよ。車から離れて。
たくさん遊びました。
たくさんお手伝いしました。
いっぱい写真を撮りました。
おじいちゃん、おばあちゃん、ありがとう。すごく楽しかった。
おじいちゃんは、大きく首を振って目を細めます。
とんでもない。楽しかったのは自分たちのほうだ。新しい思い出をありがとう。
また明日からも生きていく、その目的ができたよ。
次に来てくれるときのために、りっぱなじゃがいもを育てておくからね。
みんな元気でな。また夏休みに、わしらも元気で待っているから。
やわらかい日差しの中、孫たちを乗せた車は、春の風を受けてゆっくりと走りだしました。

『腕時計』

これか？
なかなかいいセンスだろ。え、年寄りくさいって？
そういうなよ。落ち着いた大人のデザインと言ってくれよ。
こういう毎日身に着ける小物ってのは、派手に目立つよりシックな物の方が飽きがこなくていいんだよ。
着けていてもなんとなく安心感があるね。ほっとするんだ。
ここの文字盤のあたりなんか、味があるね。
算用数字じゃなくて、ローマ数字を使っているあたりがアンティークだろ。今どきなかなかないからな。こういう古臭いの。
おっと、自分で言ってれば世話はないな。
ああ、そうだな。オレは確かに服装はブランドに凝るタイプだ。
そうだよ、２年前まではフランク・ミュラーだった。
だけど、これは特別さ。オレにとっては他のどのメーカーの時計より最高級品なんだよ。
いいじゃないか、好きで着けてるんだから。
うん、じつはさ、これ、２年前まではオヤジの時計だったんだよ。
たったひとつ残った形見なのさ。
明日が三回忌なんだ。

『おやすみこうたくん』

夜の９時をまわるころ。
そろそろ眠くなってきたかしらという時刻になって、お着替え、歯みがき、お手洗い。
そして、こうたくんとおかあさんは、いっしょのお布団に入ります。
おはなしのまえにねえ。おかあさん。
いつもみたいにぎゅっとして。うふふ。うーん、いいにおい。あんしんする。
きょうのおはなし、おとうさんのはなしがいいなあ。
いいの。きのうもだけど、きょうもなの。
おとうさんは、うみのひと。
りょうし、っていうんだよね。
ふねにのって、おさかなをたくさんとってくるしごとだよ。
しゃしんをみたことがあるけど、すごいおっきなおさかな。おとうさんは、つよくてかっこいいんだ。
そしてね、そして、そして。
こうたくんは自分でおしゃべりしながら、だんだんと夢の世界に入っていきます。

『募金ってなんだろう』

わたしはとても悩んでいます。
わたしの通っている中学校で行っている社会貢献活動のひとつに「赤い羽根共同募金」があります。
毎年秋口から年末にかけて、企業や学校などの単位で主に社会福祉のための募金を募っている、赤い羽根が象徴的なあの募金運動です。
でも実はわたし、街頭で、赤い羽根共同募金をお願いしますと大声で叫びながら、心の奥底ではとても迷っているのです。これってほんとうに、今もっとも求められている行動なのでしょうか。
困っている人たちのために募金や寄付をすることが、道徳的に正しい行為だということはもちろんわかっています。
でもそれが、今、実際に、どのような形の募金寄付にするべきなのか、どういう形をとるのが正解なのか、自分にはまったく見当がつかないのです。
宮崎県の畜産農家への寄付がいいのか。
アフリカの貧しい子供たちへのワクチンにするべきか。
臓器移植患者への支援金なのか。
交通遺児あしなが育英会寄付するべきか。
わたしたちの、ただただ善意からなる、困っている人たちを助けたいという思いのありったけを込めたこの１００円玉は、いったいどこへ差し出したらよいのでしょうか。

『クリスマスプレゼント』

よいしょ、と。
今年もいよいよ準備が忙しくなる時期だな。
いや、準備というよりもリサーチのほうがたいへんだ。
最近の子どもたちは、あちこちからいろんなプレゼントをもらうからな。
誰がどんなプレゼントをもらうのか、きちんと調べておかないと。
ほう、りなちゃんはくまのぬいぐるみか。かわいらしいね。それとじいじとばあばから、おままごとセット。
だいきくんはキャラクター自転車か。もう補助輪なしで乗れるようになったんだものな。いつまでもお兄ちゃんのお下がりじゃかわいそうだ。あとはポケットゲーム機のソフト。これが親戚のおじさんからか。ずいぶん豪華なプレゼントだね。
いやいや、今年も当日の出番は少なそうだな。
楽になるのはありがたいが、なんだかさびしい気もするね。
さて、しょうたくんのところは、と。
そうか。ママの手作りいちごケーキか。
普段は高くて買えない大粒いちごをたっぷり乗せたやつ。ママも奮発するつもりだね。
よしわかった。
しょうたくんに、今年はわしからもプレゼントだ。
きみが去年から欲しがっていた野球のグローブにしようか。一塁手用がいいんだったね。
きれいなクリスマスカードを添えておこう。
おっと、大事なものを忘れていた。これがなければわしからのプレゼントの意味がない。
夢を叶える秘密の粉、サンタクロース・ダストだ。ちょっとだけ多めにふりかけておくよ。それ、さらさらっと。
安心しておやすみなさい。いい夢を。
メリークリスマス。

『流れ星』

ねえねえおかあさん。ぼく見たんだ。
ほんとうだよ。白く光ってた。いっしゅんだけど。
きのうの夜ね、１０時ころだった。
ねむれなくてさ、ベッドから起きて、まどの外からテレビとうのイルミネーションを見てたんだ。
うんそう、なにか光るものが見たくて。
そしたらさ、夜の空が少し明るくなったような気がしてさ。気のせいかもしれないけど、なんとなくね。
うん、いっしゅんだった。
月の近くから白く光るあめ玉みたいなつぶがさあーってながれていったんだ。
あれっておとうさんだよね。
おとうさんがぼくにがんばれってメッセージくれたんだよね。
すぐにわかったよ。
だっておとうさん、夜の空が好きだったもん。暗い中で小さくても元気に光る星が大好きだったもん。
やっぱりクリスマスにはすごいプレゼントがもらえるんだね。
今日はこのままねむれそう。
おとうさんがそばにいてくれるような気がするから。
うん、おやすみなさい。

『ナナ』

学校を早退する。
机を片付け、６限の開始のチャイムがなる前に教室を出た。
担任には事情をきちんと説明してあるが、同級生はだれも知らない。でもいいんだ、話しても仕方のないことだから。

校門の前で親父が待っている。
めずらしくスーツなんか着ているのがおかしくて、見ていきなり吹いてしまった。かたいよ親父。普段どおりでいんだよ。そうじゃないとナナが不安がるだろ。病室に入る前に、趣味の悪いネクタイだけは外させよう。
親父は軽く右手を上げ合図をよこすと、すぐにタクシーを指差した。
眉間に皺を寄せている。だからかたいんだっての。

タクシーではお互い終始無言だった。
今回の手術に関しては、もうここまで散々話し合ってきたんだ。この期に及んでいまさら話すことなんて無いし、どうせ考えていることも似たり寄ったりだろう。
俺たちが今日ナナにしてやれることは、リラックスさせること、笑顔にしてやること、そして祈ることだけだ。

去年、修学旅行土産だといってナナにもらった東京タワーのキーホルダーを、ポケットの中でじっと握り締める。
そう、東京タワーだって無くなりゃしないんだ。お前も東京タワーみたいになれ。ひとつの役割が終わっても、誰かが必要としている、新しい自分になるんだ。
お前ならきっとなれる。なあ、そうだろう、ナナ。

『お願いサンタ』

そういえば、もうすぐクリスマスじゃないか。
ミライはサンタさんにお願いするプレゼント、決まったのか？
そりゃそうさ。サンタさんだって忙しいんだ。なんたって世界中の子どもたちのプレゼントを準備するんだ。早めにお願いするほうがサンタさんだって助かるだろう。
はは、大丈夫。サンタさんはどこの国の言葉だって話せるんだ。日本語でももちろん通じるよ。
パパはクリスマスイブは仕事でいないけど、サンタさんにはパパからもお願いしておくよ。

おっと、それはなんだい？
そうか、お願いごとを書いたお手紙だね。
プレゼントを持ってきてくれたときに、サンタさんに渡そうってことか。サンタさんが聞き届けてくれるお願いだといいね。よかったら、パパにこっそり見せてくれるかい。

ーサンタさんへー
「来年はプレゼントはいりません。パパといっしょにクリスマスを過ごせますように」

『見えないゴール』

終電に飛び乗り、最寄駅に着いたころには日付が変わっていた。
いつものことではある。

駅前にある馴染みのスポーツバーに入る。
大きなスポーツ大会でもなければ、この時間に客はほとんどいない。
モニター画面では海外のテニス中継が映し出されているが、観ているのは水槽の熱帯魚だけだ。
マスター、いつものジントニックを。いや、今日は甘いカクテルはよそう。ライムにしてくれ。
つまみはいらない。食事はしてないが腹は減っていない。ただ無性に疲れてるんだ。

右手でネクタイを緩め、左手で目頭をつまみ目を強く瞑る。

顔を上げると、画面ではオランダの選手がエースを決めて雄叫びを上げていた。
うらやましいね。
一生に一度くらい会心のエースを決めたいものだ。
いまさらこういう生活に愚痴を言っても始まらないが、幹部会議の資料作りに熱を上げている上司の器の小ささにはうんざりする。
部下やクライアントを無視して、上のご機嫌ばかり気にしている人間を見ていると反吐が出る。
などと思いつつも、そんな会社に飼われている自分が情けない。結局なにも変えられない。自分でわかっているのだ。

人生って、ゴールが見えない。いつまでたっても勝ちにならない。だけど負けだけはわかる。それがつらい。
なあマスター、そう思わないか。

ありがとう。うん、もういいよ。
ああ、家に戻ったら仕事の続きがあるんでね。
おやすみマスター。いい夢を。
夢か。オレの夢はどこにいったんだろう。